

「シリーズ刊行にあたって」より

本シリーズは、ジェームズ・ジェローム・ギブソン (James Jerome Gibson, 1904-1979) によって創始された生態心理学・生態学的アプローチにおける重要なアイデアや概念——アフォーダンス、生態学的情報、情報に基づく直接知覚説、知覚システム、視覚性運動制御、知覚行為循環、探索的活動と遂行的活動、生態学の実在論、環境の改変と構造化、促進行為場、協調など——を受け継いだ、さまざまな分野の日本の研究者が、自分の分野の最先端の研究を一種の「エコロジー」として捉え直し、それを「知の生態学」というスローガンのもとで世に問おうとするものである。

それは、自らの立場を括弧に入れて世界を分析する専門家の観点を特権視するのではなく、日々の生活を送る普通の人々の観点、さらには特定の事象に関わる当事者の観点から、自分(たち)と環境との関係を捉え直し、環境を変え、そして自らを変えていくことを目指す科学である。

本シリーズでは、こうした生態学的な知の発想のもと、生態学的アプローチの諸概念を用いながら、執筆者が専門とするそれぞれの分野を再記述し、そこで浮かび上がる、人間の生の模様を各テーマのもとで提示し、望ましい生の形成を展望することを目的としている。

…

執筆者たちの専門分野はきわめて多様である。生態学的アプローチのラディカリズムと醍醐味をより広くより深くより多くの人々に共有してもらえるかどうか——本シリーズでまさに「知の生態学」の真意を試してみたい。

【注文書】 ※最寄りの書店へお申し込みください。

1 ロボット 共生に向けたインタラクション 税込3,520円(本体3,200円+税) ISBN978-4-13-015181-8 【2022年3月刊】	ご注文数	冊
2 間合い 生態学的現象学の探究 税込3,520円(本体3,200円+税) ISBN978-4-13-015182-5 【2022年3月刊】	ご注文数	冊
3 自己と他者 身体性のパースペクティヴから 税込3,630円(本体3,300円+税) ISBN978-4-13-015183-2 【2022年3月刊行予定】	ご注文数	冊
4 サイボーグ 人工物を理解するための鍵 ISBN978-4-13-015184-9 【2022年4月刊行予定】	ご注文数	冊
5 動物 ひと・環境との倫理的共生 ISBN978-4-13-015185-6 【2022年5月刊行予定】	ご注文数	冊
6 メディアとしての身体 世界/他者と交流するためのインタフェース ISBN978-4-13-015186-3 【2022年6月刊行予定】	ご注文数	冊
7 想起 過去に接近する方法 ISBN978-4-13-015187-0 【2022年7月刊行予定】	ご注文数	冊
8 排除 個人化しない暴力へのアプローチ ISBN978-4-13-015188-7 【2022年8月刊行予定】	ご注文数	冊
9 アフォーダンス そのルーツと最前線 ISBN978-4-13-015189-4 【2022年9月完結予定】	ご注文数	冊

[書店名] (取次番線)	[ご芳名]	[お電話番号]
	[ご住所]	

東京大学出版会 〒153-0041 東京都黒区駒場4-5-29 TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991 <http://www.utp.or.jp/>

人と環境の相互作用を描く知的冒険の最前線

知の生態学の冒険 J・J・ギブソンの継承

全9巻

河野哲也・三嶋博之・田中彰吾——[編]

四六判上製／縦組／平均200ページ 【2022年3月刊行開始予定】

- 1** **ロボット** 共生に向けたインタラクション
- 2** **間合い** 生態学的現象学の探究
- 3** **自己と他者** 身体性のパースペクティヴから
- 4** **サイボーグ** 人工物を理解するための鍵
- 5** **動物** ひと・環境との倫理的共生
- 6** **メディアとしての身体** 世界/他者と交流するためのインタフェース
- 7** **想起** 過去に接近する方法
- 8** **排除** 個人化しない暴力へのアプローチ
- 9** **アフォーダンス** そのルーツと最前線

本シリーズの特徴

◆ J・J・ギブソン（James Jerome Gibson, 1904-1979）によって創始された生態心理学・生態学的アプローチにおける重要なアイデアや概念——アフォーダンスなど——を受け継いだ、さまざまな分野の日本の研究者が、自分の分野の最先端の研究を一種の「エコロジー」として捉え直し、それを「知の生態学」というスローガンのもとで世に問う。

◆ 生態学的な知（知の生態学）とは、ある事象の存在の特徴・体制・様式を知ることがそれを取り囲む周囲の存在を知り、周囲とどんな関係を結びながら時間の経過とともに変化や変貌をとげていくのか、また周囲にどのような変化が生じるのかを知ることと等しいと見なす、そうした知である。

◆ 生態学的アプローチのラディカリズムと醍醐味をより広くより深くより多くの人々に共有してもらえるよう、単著を基本としてシリーズを構成。

岡田美智男

各巻構成

1 ロボット 共生に向けたインタラクション

岡田美智男（豊橋技術科学大学情報・知能工学系教授）

岡田美智男

「考え込むことなく、まわりに半ば委ねてしまおう！」

人間との関係やインタラクションに焦点を合わせ、〈お掃除ロボット〉や著者が開発した〈ゴミ箱ロボット〉といった「関係論的なロボット」の具体事例を紹介し、生態学的な観点からその実相を記述することで人間とロボットの共生の可能性を浮かび上がらせる。

【主要目次】

- 第1章　まわりを味方にしてしまうロボットたち
- 第2章　ひとりのできるってホントなの？
- 第3章　ロボットとの社会的相互行為の組織化
- 第4章　言葉足らずな発話が生み出すもの
- 第5章　ロボットとの〈並ぶ関係〉でのコミュニケーション

岡田美智男

2 間合い 生態学的現象学の探究

河野哲也（立教大学文学部教授）

河野哲也

「間合いの本質とは、このリズムにこそある」

日本の伝統的な芸術や芸能、武道の分野のなかで重要な役割を担い、日本の文化全般にとって美学的で哲学的な原理として長く論じられてきた間（ま、あいだ、あわい）や間合いについて生態学的現象学の視点からそのダイナミズムを明らかにする。

【主要目次】

- 第1章　生態学的現象学とは何か
- 第2章　技と型、その音楽的本質
- 第3章　間合いとリズム
- 第4章　花と離見の見
- 第5章　流体としての身体
- 第6章　間合いとアフォーダンス

3 自己と他者

身体性のパースペクティヴから

田中彰吾（東海大学現代教養センター教授）

田中彰吾

「行為が変わると知覚が変わる」

身体性に関連する認知科学・神経科学の主なトピックを取り上げ、自己と他者の身体的な相互作用を生態学的現象学から考察する。脳内過程ではなく、「脳-身体-環境」というエコロジカルな連続性のもとでの身体的経験の理解を通じて自己と他者が出会う社会的環境を描き直す。

【主要目次】

- 第1章　動きのなかにある自己
- 第2章　脱身体化される自己
- 第3章　「脳の中の身体」を超えて
- 第4章　行為でつながる自己と他者
- 第5章　身体に媒介される自己と他者
- 第6章　自己・他者・ナラティヴ

田中彰吾

4 サイボーグ 人工物を理解するための鍵

柴田 崇

「サイボーグ論の「転回」とは、

「拡張」から「延長」への転回である」

人工物の意味とは何か？　この問いに、サイボーグを導き手とし、それについて紡がれた言説を批判的に迎えることで漸近する。意味を先取りした能力／機能の「拡張」から、使用の経験を記述可能な「延長」への生態学的な転回が人工物理解の新たな視座を提供する。

【主要目次】

- 第1章　サイボーグ論の正統：「拡張」の技術論
- 第2章　サイボーグ論の転回：「延長」への定位

第3章　『生まれながらのサイボーグ』解題

第4章　サイボーグ論の転回、そしてまとめ

5 動物 ひと・環境との倫理的共生

谷津裕子

谷津裕子（東京慈恵会医科大学教授）

谷津裕子

「動物への共感は、

ひとへの共感へとつながっている」

動物の権利をめぐる歴史や現況を紹介し、複雑で多岐にわたる動物利用問題についてアフォーダンス理論を用いて整理する。アフォーダンス理論によって動物が自由をもって生きる権利を正当に認めつつ、同時に人も生存可能となるような生き方の幅、自由の幅を拡張する考え方を提供し、人と動物との倫理的共生のあり方を考察する。

【主要目次】

- 第1章　ひとから見える動物の多様なありよう
- 第2章　ひとから見える世界、動物から見える世界
- 第3章　ひとと動物、環境の倫理的つながり

谷津裕子

6 メディアとしての身体 世界／他者と交流するためのインタフェース

長滝祥司（中京大学国際学部教授）

長滝祥司

「そもそも身体自体が

「メディア性」(mediarity) をもっている」

身体をメディアとする人間と世界、他者とのインタラクションを生態学的現象学の方法論を用いて記述分析し、その具体像を明らかにする。身体メディア性の機能的拡張や「傷つきやすさ」(vulnerability)の概念について考察し、アフォーダンスを捉え直すことで身体と世界についての新たなパースペクティヴを切り開く。

【主要目次】

- 第1章　知覚・実在・メディアとしての身体
- 第2章　身体・スポーツ・ヴァーチャル現実
- 第3章　人間機械論の彼方
- 第4章　進化・科学技術・傷つきやすさ
- 第5章　皮膚-感覚の現象学
- 第6章　感情と身体：表層としての自己について
- 第7章　他者理解のメディアとしての身体
- 補　章　実験〈観情-観相〉学の試み

長滝祥司

7 想起 過去に接近する方法

森　直久（札幌学院大学心理学部教授）

森 直久

「入れ子になった二重の身体と環境(自己)を同時に知覚することが想起である」

過去に言及する行為を想起と呼ぶ。想起を通じて、想起者の体験

へと接近し得る可能性を追求する。記憶痕跡論や記憶構成論といった、これまで紡がれた記憶論の主張を批判的に辿りつつ、J・J・ギブソンの生態学的知覚論を経由することで「生きている想起」を説明可能な新たな記憶・想起論＝生態学的想起論を構想する。

【主要目次】

- 第1章　エビングハウスと記憶の実験研究
- 第2章　バートレットを再構成する
- 第3章　ナイサーの日常記憶研究
- 第4章　環境と接触した体験の想起
- 第5章　想起の新しい理論

熊谷晋一郎

熊谷晋一郎（東京大学先端科学技術研究センター准教授）

熊谷晋一郎

8 排除 個人化しない暴力へのアプローチ

「依存先の少なさ、言語から排除された経験、権力勾配といった条件がそろった場所で、暴力が起きやすくなる」

障害者の暴力被害のリスクや暴力加害のリスクについて扱い、被害者と加害者、そのどちらにも共通する要素として、社会的排除と依存先の少なさ、トラウマを取り上げ、暴力の生態学的な理解を試み、著者らが進める当事者研究プログラムを紹介する。本書は誰をも排除しない社会の実現に向けた、現時点での中間報告である。

【主要目次】

- 第1章　暴力の当事者研究
- 第2章　暴力についての先行研究
- 第3章　家族・支援者に知っておいてほしいこと

【主要目次】

9 アフォーダンス そのルーツと最前線

三嶋博之（早稲田大学人間科学学術院教授）

河野哲也

田中彰吾

【主要目次】

「アフォーダンス」概念の成立から、継承者たちによる近年の展開までを、それを理解するために必要な鍵概念群の解説とともに包括的に論じ、アフォーダンスの価値と可能性について改めて検討する。また、生態学的アプローチと脳研究や倫理学との関係も追求することで、アフォーダンスの過去・現在・未来を浮かび上がらせる。

【主要目次】

- 第1章　ギブソンのアフォーダンス　（三嶋博之）
- 第2章　アフォーダンスのルーツ　（三嶋博之）
- 第3章　アフォーダンスの展開：定式化の試み　（三嶋博之）
- 第4章　アフォーダンスと心の科学　（田中彰吾）
- 第5章　アフォーダンスと社会物理学　（河野哲也）